

福島県文化財調査報告書第46集

東北新幹線関係遺跡発掘調査略報 I



1974年3月

福島県教育委員会

〔表紙写真〕 治部池横穴 8 号 前庭部より玄室方向を見る。

序 文

私たちの祖先が残してきた文化財は、今日の私たちにとってかけがえのない貴重な遺産であり、私たちはそれらの文化遺産を可能な限り保存し、後世へ伝える義務があります。しかし、周知のとおり、豊かな明日の東北を築こうという国家的施策のもとに、東北新幹線が建設されることになりました。そのため県内を102kmにわたって新幹線路線が縦断し、この建設事業によって20余の貴重な遺跡が消え去ることとなりました。

開発事業と文化財保護はともに人間生活を豊かにするものであり、開発によって失われる遺跡は、記録保存という形で後世へ伝えねばなりません。

このような事情から、本県教育委員会では日本国有鉄道の委託をうけ、昭和47年度から路線内遺跡の発掘調査を実施しております。昭和47年度は2遺跡の調査を完了し、昭和48年度は8遺跡の発掘調査を実施しました。以下、資料については鋭意整理中ですが、とりあえず概要をここに刊行した次第です。広く御活用いただければ幸いです。

御多忙中、調査に御協力くださった地域の方々、関係各市町村教育委員会に厚く御礼申しあげます。

昭和49年3月

福島県教育委員会教育長

三本杉 國 雄

目 次

I	発掘調査までの経過-----	1
II	調査遺跡の概要	
1.	道 南 遺 跡(第1次)-----	2
2.	泉 川 遺 跡-----	4
3.	赤坂裏遺跡-----	6
4.	芹 沢 遺 跡-----	8
5.	古 屋 敷 遺 跡-----	10
6.	岩 渕 境 遺 跡-----	12
7.	治部池横穴群-----	14
8.	徳 定 遺 跡-----	16
9.	皆 屋 敷 遺 跡(第1次)-----	18
10.	御 前 古 墳-----	20
III	調 査 遺 跡-----	21
IV	遺跡所在地図-----	22
V	調査遺跡略年表-----	26
VI	用 語 解 説	

例

言

1. この略報は日本国有鉄道と委託契約を結び、福島県教育委員会が発掘調査を実施したものの結果である。
2. この略報は事業報告を兼ねたもので、本報告書は後日刊行の予定である。
3. 便宜上、47年度調査の2遺跡をもふくむが、48年度の岩渕境遺跡の2次調査結果は調査日程上掲載できなかつた。
4. 原稿執筆・図面・写真・編集は、文化課文化財保護係の遺跡担当がおこなった。

I 発掘調査までの経過

「全国新幹線鉄道整備法」にもとづき東北新幹線の建設計画が発表され、その路線内に包蔵された埋蔵文化財を保護するため、県教育委員会は、関係機関と連絡してその対策を進めてきた。

昭和46年1月26日には国鉄盛岡工事局と協議を開始し、同年4月には①史跡及びこれに準ずる重要遺跡については、保存のため路線からはずすこと、②その他の遺跡についても可能な限り保存するよう国鉄側に要請した。国鉄側からは、6月に仙台新幹線工事局長より当委員会に対し、東北新幹線建設についての協力要請がなされた。

以上の協議や要請を背景に、9月には想定路線1km幅にふくまれる遺跡の分布調査を行ない、国鉄ではこれを路線決定資料として利用した。10月には、県内関係市町村と東北新幹線埋蔵文化財保存対策打合せ会を開き、種々取扱いを協議し、ついでこれらの市町村の協力を得て、10月22日より11月27日まで、路線内の埋蔵文化財所在調査を行ない、134個所の遺跡を摘出した。引続き、12月8日より翌47年2月17日まで、路線に直接かかると思われる27個所の遺跡の予備調査を実施し、遺跡の範囲・種類・遺構の深さ等を調べ、発掘のための基礎資料とした。

このように県教委は急ピッチで文化財問題について対応していくが、この間新幹線関連の青森・岩手・宮城の各関係県教委とも連絡会議をもち、文化財保存について協議を行なっている。

そしてこれらの結果を「東北新幹線遺跡分布調査報告書」(福島県文化財調査報告書第33集・1972年3月)として刊行した。

47年度に入り、確定路線内遺跡について、国鉄側と共に実地調査し、記録保存すべき遺跡について、その取扱いを検討した。

路線決定について国鉄側では当委員会からの情報をもとに、でき得る限り遺跡を避けるように配慮したが、それでもなお20個所以上の遺跡が路線に含まれることになった。しかし、路線決定以後も国鉄側と当委員会がともに努力を続け、徳定遺跡のように大巾な原設計変更により遺跡破かいを最少限に防止した例もある。国鉄の文化財保存のために示された数々の誠意に敬意を表するものである。

発掘調査は、原則として土地買収後に行なうという契約であったが、用地買収が難行したため、地権者の了解を得る時間がかかり、結局47年11月から実際に発掘調査は開始された。



—出土品を前に現地説明会を開く(徳定遺跡)—

II 調査遺跡の概要

I. 道南遺跡(第1次)

〈調査日誌〉

7月30日：本日より第1次調査開始。調査開始にあたり調査員打合せ。担当者から作業員に調査趣旨・方法の説明。A～I、1～10の計90グリッド設定。A-6～8、B-7・8の現地表より-40cmで落ち込み検出。以後これを1号住居跡と呼称する。C-1・2から住居跡と考えられる落ち込み検出した。7月31日：C-1・2から検出された落ち込みがB-1・2、D-1・2の排土により住居跡であることを確認した。以後これを2号住居跡と呼称する。しかし、本住居の北壁は道路により不明確である。8月1日：1・2号住居の土壤断面図作成。13列以南のグリッドを設定する。8月2日：G-18・19で落ち込みを検出した。3号住居跡と呼称する。F-17で住居跡コーナーと考えられる落ち込みを検出したが、今回の調査区域外のため確認のみにとどめる。8月3日：3号住居跡土壤断面図の作成。8月4日：1号住居跡S.B.の除去。3号住居跡は覆土の分層排土。8月5日：1号住居跡調査完了。3号住居跡床面より窓付器台出土。8月6日：2号住居跡清掃。2号住居跡北東壁下より台付甕出土。8月7日：2号住居跡調査完了。8月8日：3号住居跡調査完了。

〈調査概要〉

本遺跡は、阿武隈川と谷津田川により形成された微高地上に所在し、東北本線西郷駅の東側にあたる。また、西側にも土師器の散布が認められることから、遺跡の同一性も考えられる。周辺遺跡としては、本遺跡東方500mに南掘切遺跡の所在が知られている。

本遺跡の調査方法は、新幹線中心杭7+60を基点とし、3×3mのグリッドを設定。2グリッドを単位として市松型に調査した。発掘総面積約1,500m²。

1号住居跡

本住居跡は予備調査に際して検出されたものである。床面は現地表下約60cm、ロームを約26～30cm切り込んで周壁としている。主軸はN-30°E。南北辺約370cm、東西辺約380cmを計るほぼ方形のプランを呈する。床面は比較的堅く締り、炉の附近はそれが顕著である。周溝、柱穴はなし。壁はローム層を切り込んでおり状態は比較的良好。壁高は26～30cmを計る。炉は北壁より、やや中央部に位置する。焼土は少ない。貯蔵穴は住居南東コーナーより設けられ、約45×65cmのほぼ長方形を呈し深さ約18cmである。

出土遺物：小形広口壺、高杯、その他破片が少量出土。

2号住居跡

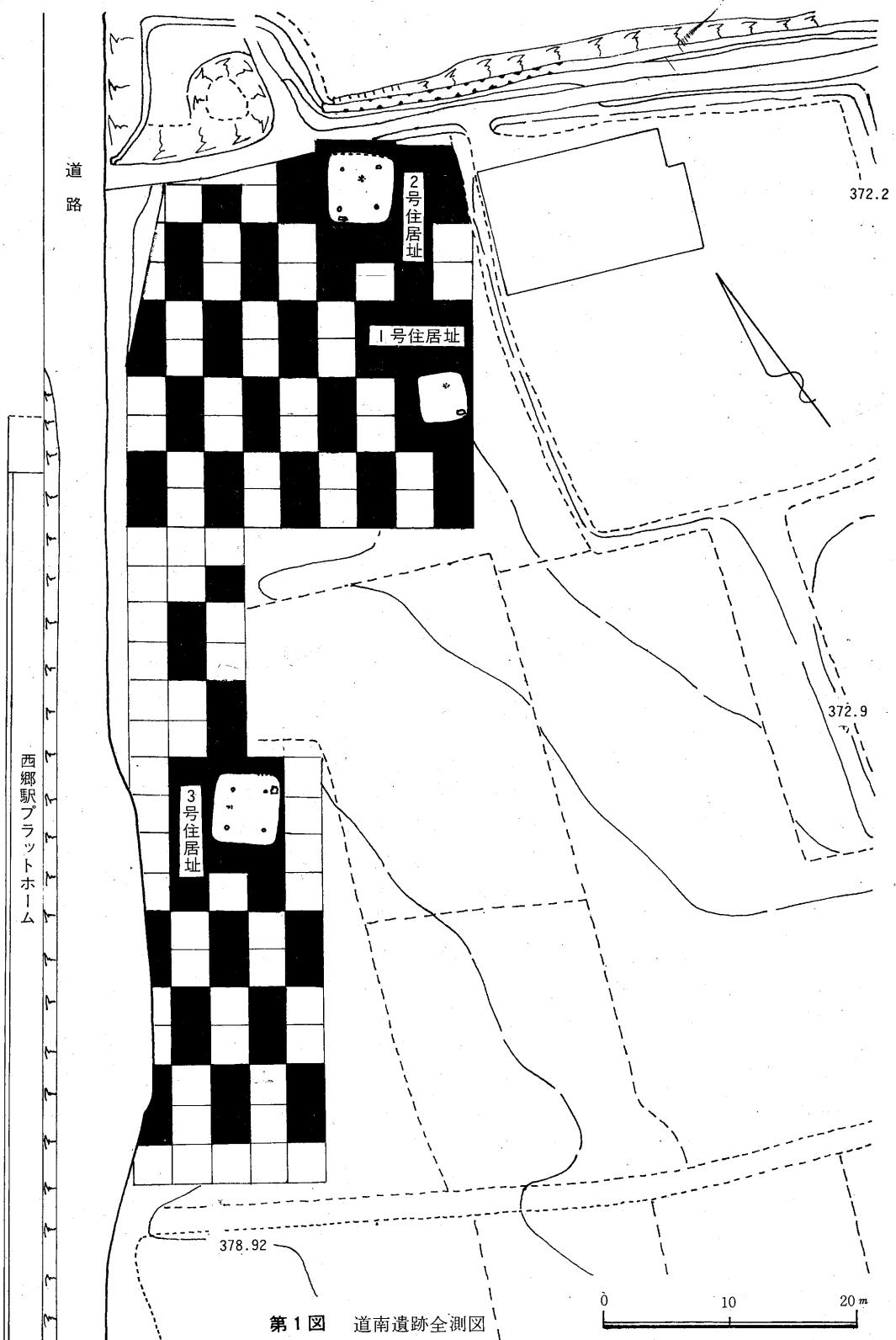
本住居跡は1号住居跡の北方約13mに位置する。床面は現地表下約40～50cm、ロームを約20cm切り込んで周壁としている。主軸はN-42°E。南北辺約490cm、東西辺約500cmを計るほぼ方形のプランを呈する。床面は平坦で堅く締っている。柱穴は4個。周溝なし。炉は北壁よりほぼ中央に位置する。貯蔵穴と考えられるものは南壁西より約50×85cm、深さ約18cmのものが設けられている。また、木炭が住居中央部から放射状に検出された。

出土遺物：壺、台付甕、その他破片少量。

3号住居跡

本住居跡は1号住居跡の南西約30mに位置する。床面は現地表下約75cm、ロームを約45cm切り込んで壁としている。主軸N-40°W、南北辺約550cm、東西辺約550cmを計るほぼ方形プランを呈する。床面は軟弱で凹凸が著しい。炉附近のみが固く締っている。主柱穴は4個、その他に住居跡コーナーに2個所のピットを設けている。周溝なし。壁高は約45cmを計る。貯蔵穴と考えられるものが、東壁北より約55×55cm、深さ約36cmの方形を呈して設けられている。この中から粘土ブロックが検出された。

出土遺物：土師器器台、その他完形となる破片少量出土。



第1図 道南遺跡全測図

2. 泉川遺跡

〈調査日誌〉

10月8日、グリッド設定を行い表上はぎを開始する。粗掘りの段階で縄文早・前期の土器片を少量検出、10月15日以降、黒曜石を用いた石鏃、打製石斧、尖底土器が出土した。10月17日、集石遺構・小竪穴遺構を検出、集石遺構内より茅山式土器片が出土した。11月1日より順次ピット1よりピット27までの精査・実測・写真撮影を行った。集石遺構も同様に精査・実測を行った。11月13日調査終了予定日であったが、ピット数が多く実測が遅れ調査を延期し、遺跡全測図・遺跡全景撮影を行い、11月15日調査終了とした。

〈調査概要〉

遺跡 白河駅の北4.5kmに本遺跡は存在する。本遺跡は那須山系より続く丘陵が東西にのびる一端にあり、沢を堰止めて構築した泉川貯水池の南岸の北斜面に存在する。付近には板小屋遺跡・牛清水遺跡・広谷地遺跡など縄文時代の遺跡が数多い。

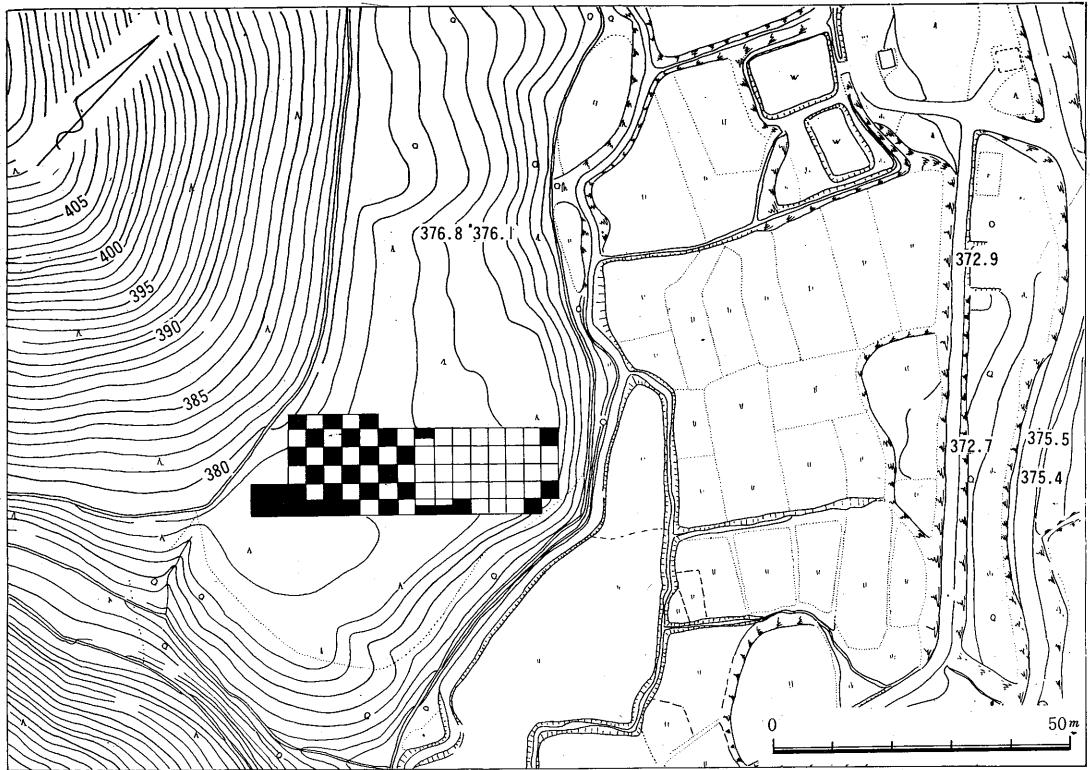
全調査区域に3m×3mのグリッドを設定した。全調査区面積は約426m²である。層位は、ほぼ第1層(耕作土層)から第5層(地山)に分けられる。遺跡の北ほど第3層(黒褐色土層)・第4層(黒褐色土層に細凝灰岩粒を含む)を欠いている。

遺構 本遺跡で確認した遺構は、小竪穴遺構27基・集石遺構3基である。小竪穴遺構を形態分類すると①断面袋状の小竪穴5基、②円筒形の小竪穴8基・③平面円形の浅い小竪穴9基、④長楕円形の深い竪穴1基、⑤楕円形の浅い小竪穴2基である。この中で遺物を含むのは、①袋状小竪穴2基であり、その他の小竪穴内は、全く遺物を含まないものと、少量の土器片を含むものに分類される。また小竪穴内に岩石を含むものが、②と③において4基に認められた。

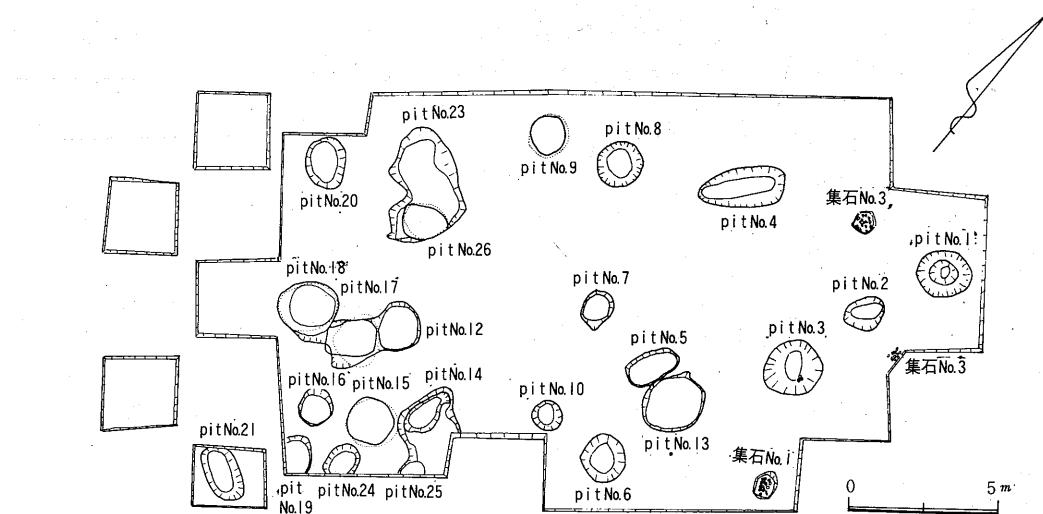
集石遺構は3基検出した。1基は第4層を掘込んで構築しているが、残りの2基は地山面に配石されている。第4層面に構築された集石遺構の下部には火を受けた痕跡があり、小竪穴遺構の上部に集石遺構が構築された可能性がある。

遺物 遺物の出土状況は、遺跡全般から縄文早・前・晩期の土器片および石器が発見されたが、北半がやや資料の出土が多かった。第1層より第3層までの層位は攪乱を受けているよう土器はいずれも小片であった。小竪穴遺構内からは少量の土器片が発見されたが、主として縄文早期の破片が主体を占めているようである。なお袋状小竪穴遺構2基からは完形に近い土器が出土し本遺跡の重要性を提起した。遺物の総量はダンボール箱にして6箱で、うち完形品に近い土器3点、黒曜石を用いた石鏃5点・スクレイパー2点・石斧・凹石・叩石・礫器等あわせて20点出土した。いずれも遺構と結びつくものはない。土器文様は沈線文・撲糸文・竹管文・貝殻条痕文などが占めている。袋状小竪穴内出土の土器、集石下層面出土の土器は口縁部近くが沈線文と竹管文による文様構成で区画され、胴部下半と内面を貝殻条痕文により施文されている。この土器は鶴ヶ島台式土器に近似している。

まとめ 以上のように本遺跡は小竪穴遺構27基、集石遺構3基と貴重な資料を提示した。この遺構がどのような性格をもつのか不明であるが、今後、遺物・遺構との関連から縄文早期の社会を究明していきたい。なお、調査地区外にも縄文早期と推定される遺構が存在するものと考えられ、今後保存もしくは、本格的な調査が望まれる。また対岸の縄文早期遺跡も本遺跡との関連が注目される。



第2図 泉川遺跡地形図



第3図 泉川遺跡全測図

3. 赤坂裏遺跡

〈調査日誌〉

6月4日現場着、ただちに3×3mのグリッド設定を行ない、遺跡中央を横切る農道をはさんで北半山側をI区、南半をII区とし、II区より発掘作業を開始する。同6日、II区と並行してI区も作業に入る。同8日、千鳥に掘りすすんだII区各グリッドの掘り込みを終了する。同日、I区1A1Bグリッドより整地面、焼土面、柱穴(1号住居址と命名)6Cグリッドから焼土面、整地面(2号住居址と命名)I区全体から遺構らしき大小の溝を検出。このうち細い溝は戦後のものと判明。同14日、II区の実測、写真撮影を終了したグリッドから埋め戻しを行ない、千鳥に掘り残したグリッドの排土作業を開始する。I区は遺構の存在が確認されたため、全面発掘することにする。以後7月6日まで、遺構精査、実測およびII区の埋め戻し作業を並行して行なう。7月6日調査最終日午後、I区南側グリッドに3号住居址を検出、第2次調査の必要を認め第1次調査を終える。

9月3日、第2次調査を開始。第1次調査において未調査であった3号住居址の検出精査を行ない9月7日全調査を終える。

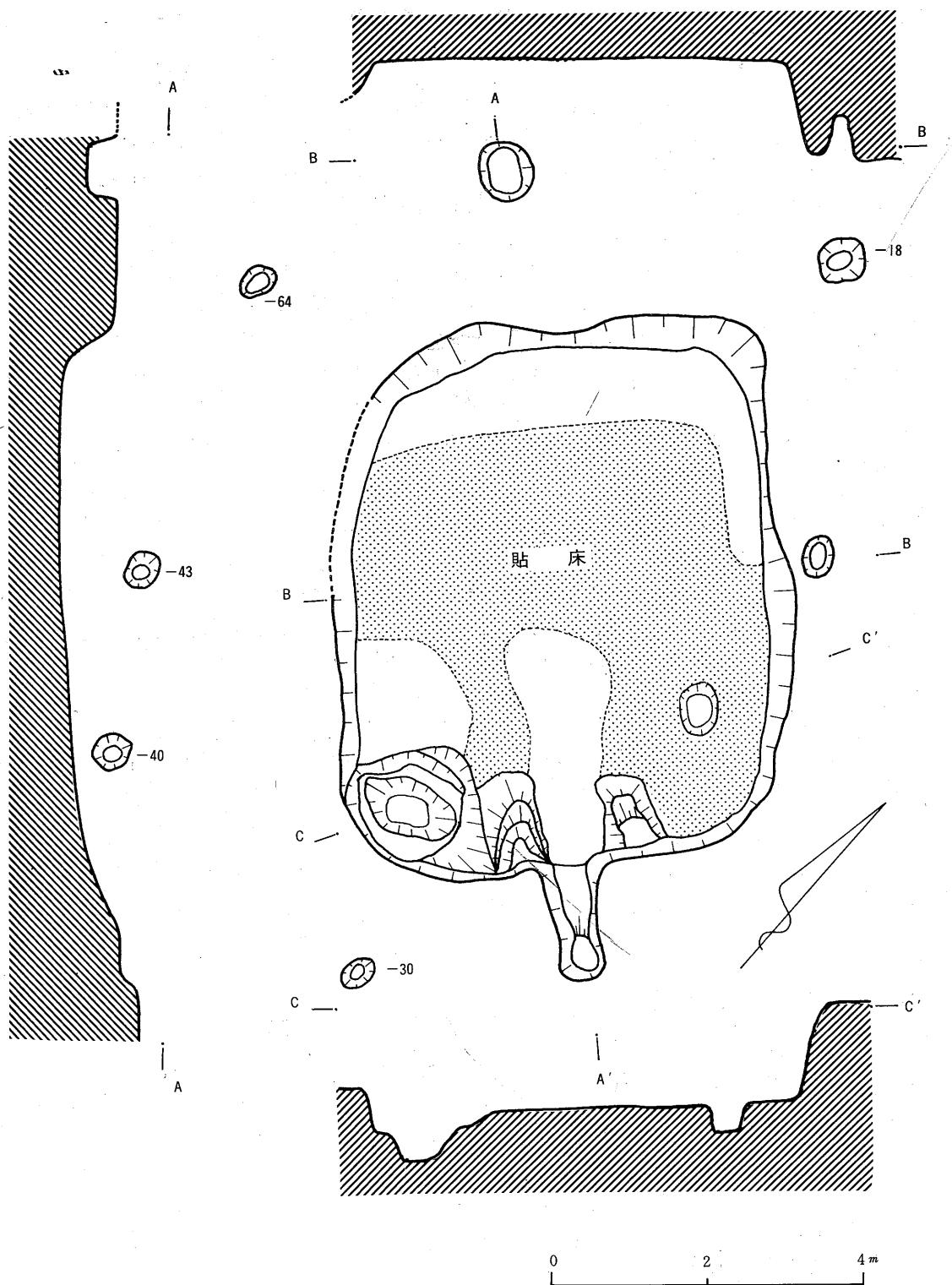
〈調査概要〉

住居址 住居址はI区に3軒検出された。このうち比較的明確なプランをもつものは3号住居址のみである。3号住居はほぼ床面全面が貼床整地されており、カマド右側に貯蔵穴、左側に性格不明のピットを有する。柱穴らしきものは住居外に8個認められるが、一定の規則性をもたず、どれがこの住居の柱穴であるかは確認できない。この3号住居は壁のつくりなどかなり粗雑で、カマドの焼け具合などからみても使用期間はそれほど長くはないと思われる。しかし、貯蔵穴内あるいはカマド付近から多数の内面黒色処理土師器片のほか、墨書銘、線刻銘のある土師器片が出土しており軽視できない。1号住居は床面積が約10m²で住居北壁が検出されたが住居南半部は貼床整地がなされており、壁は確認されない。この1号住居は、斜面上部を掘り込み、下部を貼床整地した掘立住居と思われ、pitは4基検出されたが、それらの性格、機能は不明である。1号住居からは主にカマド周辺から、土師杯、須恵質土器片、灰釉陶片などが出土している。2号住居はその中心部が巾1m、深さ50cmの溝によって切られており、明確なプランをつかみ得ないが、1号住居と同様、北壁が確認され、住居南半は貼床整地がなされているところから、斜面上部を掘り込んだ掘立住居であろう。ただ1号住居とのちがう点は、北壁にそって住居内周溝が検出されたことである。柱穴とおぼしきpitは周溝内に2基認められ、またカマド右側に貯蔵穴も検出された。遺物はカマド内、貯蔵穴より土師器片が約30点出土している。なお、いずれの住居もカマドは東壁にあり、主軸を北東～南西方向にもつ。(発掘面積1,300m²)

遺物 遺物は、土師器片約500点、須恵器片約40点のほか、砥石、平根鉄鏃、石鏃、須恵製円面硯、青磁片、白磁片、灰釉陶片がいずれも数点ずつ出土している。完形品は10点ほどでいずれも土師杯である。また「万上」「中万」と読める墨書銘土師器片、「大」と読める線刻銘を有する土師器底部片が出土している。遺物についてはその整理が未だ行なわれていないため、その詳細は不明である。

まとめ

当遺跡は、出土遺物などからみて平安時代に中心時期をおく遺跡であると思われるが、新幹線路線は赤坂裏遺跡の中心からはずれており、その中心は、路線西側のかつての尾根筋にあたる微高地上にあると思われる。墨書銘土師器、円面硯などが出土するところからこの遺跡はかなりの規模のものと思われ、その性格は付近の「大門」「寺池」などの地名とともに検討を要するであろう。



第4図 赤坂裏遺跡第3号住居址

4. 芹沢遺跡

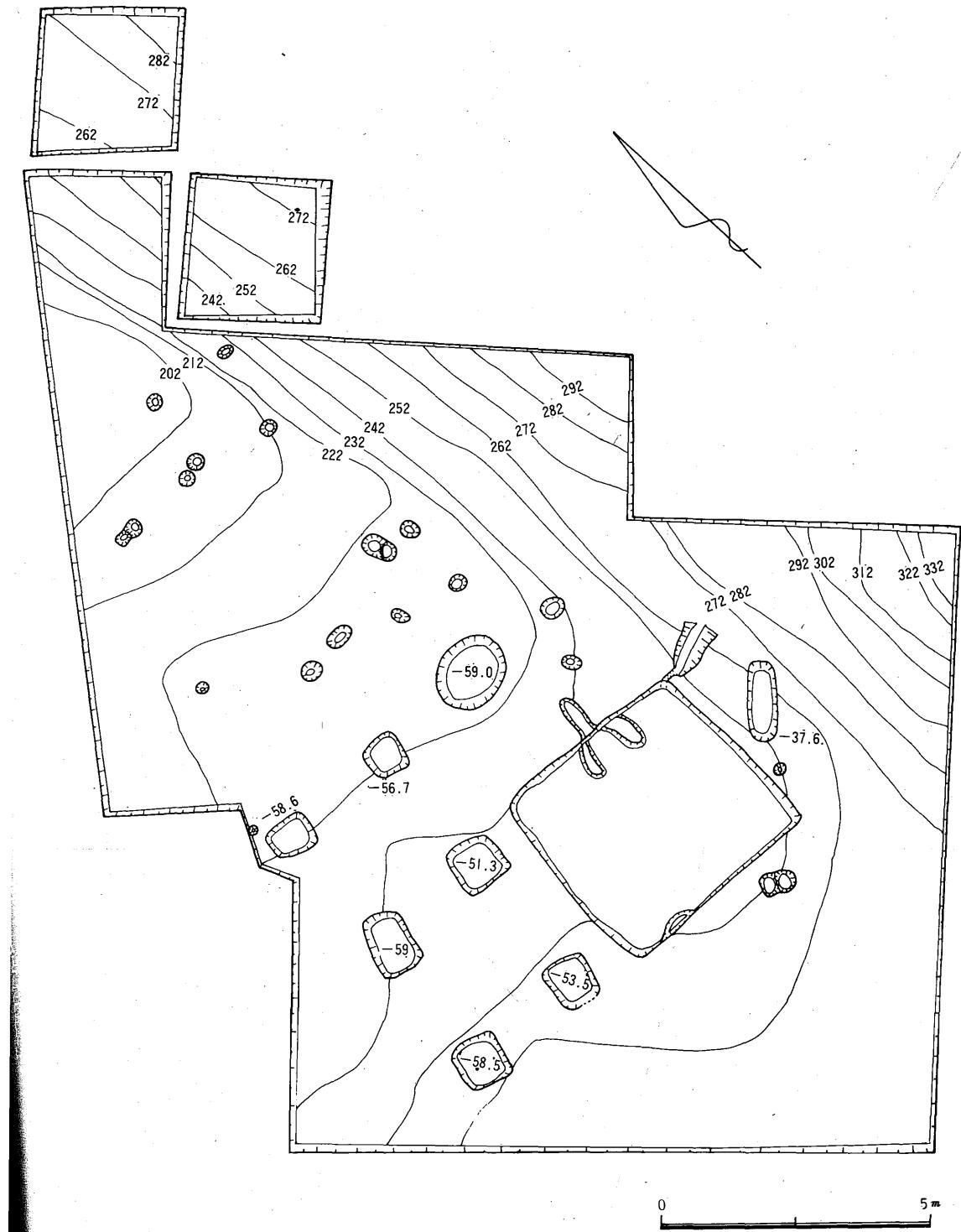
〈調査日誌〉

3月5日(月)～3月10日(土)：担当者より発掘上の諸注意・調査の意義等の話しがある。雑木・伐木の整理の後、発掘開始。山腹傾斜地の調査区は、トレンチ法を採用。東側からトレンチ名をAT～ETとする。各トレンチ下半分より、須恵器・土師器の小片出土。路線外における芹沢遺跡の現況を調査し、東側の崖部に1基西側の整地部崖面で2基の住居址を確認。道路下谷側の平坦地にグリッド設定。トレンチ調査区検出の溝状遺構は、尾根から谷へ向っており、Eトレンチ上部に黒土を固めた低い土壘状のものがある。道路下B10グリッドから、ロームを掘り込んで作られた住居址検出。カマドの煙道長く柱穴は不明。C7グリッド堆積土から、縄文前期土器片を検出。

3月12日(月)～3月17日(土)：ESグリッドより、約1mの深さから縄文前期の土器出土。住居址カマド内で、土師器長胴甕の口縁部および木葉底を検出。住居址周辺から1m内外の方形に近いピットを、2列に並んだような状態で6個検出。柱穴様小ピットも幾つか確認したが、確実に住居跡に伴なうものか否かは定かでない。断面図・全測図等の実測開始。写真撮影をし、埋戻しを開始する。

〈調査概要〉

天栄村の西端には、標高1,544mの二岐山があり、南北方向に1,000mをこす山が幾つかある。この山々から阿武隈川の方向に向って、幾条かの小支丘がほぼ平行に走る。支丘と支丘の低地は、川が合流して阿武隈川へ注ぐ。芹沢遺跡は、標高約300mのこの支丘の南側に面し、東西約70m、南北約50mにわたっており、緩傾斜をなしている。遺跡の分布は、周辺にもかなり濃密で、縄文～古墳の各時代にわたってひろがる。発掘調査予定地は約1,000m²で、このうち約8割を調査した。トンネルの入口にあたる道路より北側の斜面は、設定したトレンチの下半分からのみ、土師器・須恵器の破片が出土する。傾斜面の中ほどは、東から西へ谷間となるが、この方向に表土層下のローム層を切って巾40cm前後の溝が走る。溝の築かれた時期は明らかでないが、東のやや平坦な部分から排水の目的で設けられたものと思われる。溝は、路線外の谷筋へ続いている。トレンチ調査区より出土した土器片は、原位置でなく、東西の平坦地からこの斜面部へ流れこんだものと思われる。道路下の調査区は、3m×3mのグリッドを60個設定する。層位は、一般に耕作土層・埋め立て層・暗黒褐色土層・黒土層・ローム層・となっていた。発見された住居址は、古墳時代のもので、8世紀前後と考えられ、プランは約370cm×410cmで、110cmの長さの煙道を有する。プラン外に柱穴様のピットが認められるが、住居址に伴なうものかどうか不明確であり、住居址内にも、柱穴は認められない。カマドは、両袖を粘土で固めており、壁の中央よりやや片寄った所に位置している。この住居址で興味を引くのは、カマド壁の右側コーナー下部に径20cm程の貫通孔があることである。孔は端に向って開口し、台地下へ排水するかのような構造となってのびている。住居址西側にある方形ピットは、2列に3個ずつ並んでおり、内部から遺物の検出はなく、時期不明である。グリッド北半分の旧平坦地(ローム層)端附近の黒褐色土層から縄文前期の土器片が数百片出土したが原位置でなく、やはり移動していると思われる。フレークや叩石等も出土しているので、そう遠くない所に遺跡があったものと考えられる。



第5図 芹沢遺跡グリッド調査区遺構全測図

5. 古屋敷遺跡

〈調査日誌〉

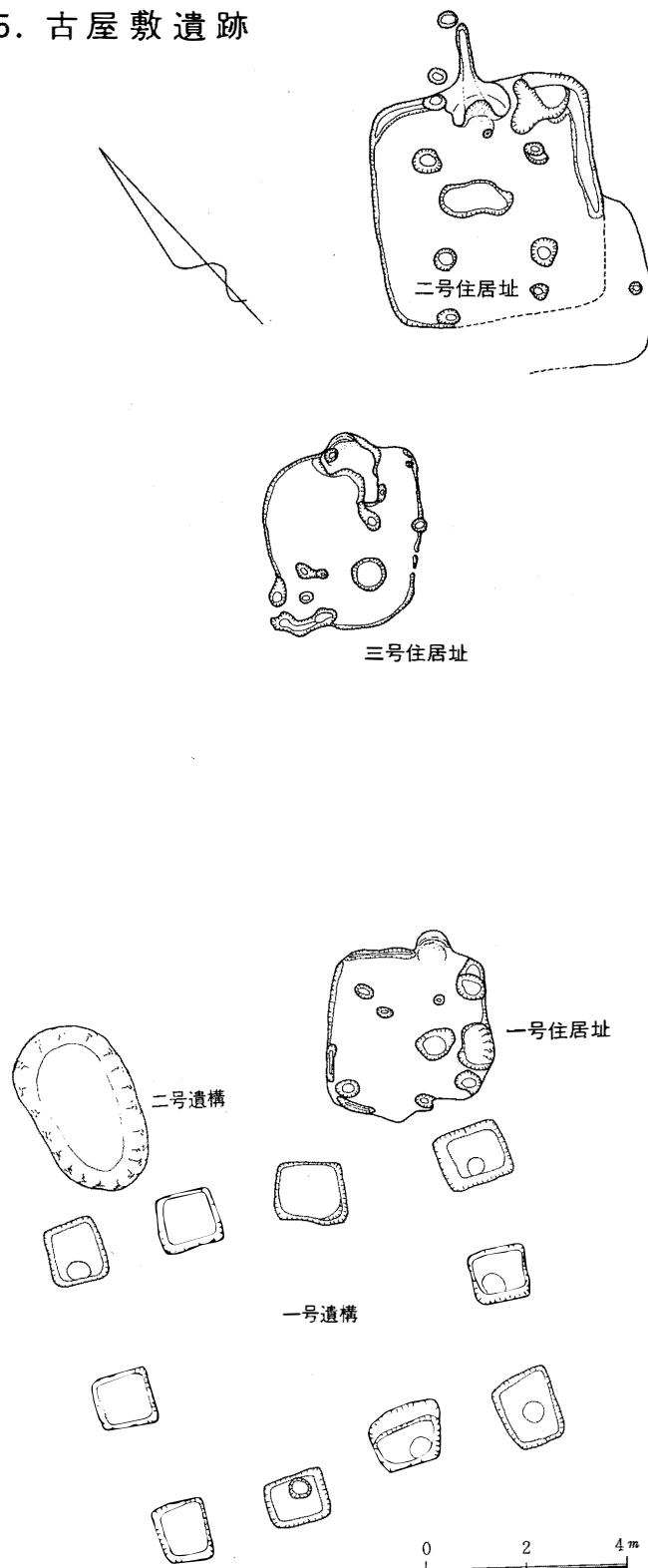
5月28日第1次調査を開始した。A地点の桑畑に $2m \times 20m$ のトレンチを3本設定し発掘した結果、わずかの土師器、須恵器の小破片を得るに止どまつた。5月30日、A地点より $400m$ ほど南の台地の南端にあたるなだらかな斜面の畠地をB地点とし、南北方向 $45m$ 、東西方向 $18m$ の地区に $3m \times 3m$ のグリッドを設定し、水田に近い南部から発掘に着手した。6月4日、南部から方形の掘り込みをもつ柱穴群を確認し、1号遺構とした。またその1号遺構の北側に隣接する小竪穴を2号遺構とした。引き続き1号遺構の北東側の竪穴を1号住居址として、6月5日実測を完了し、第1次調査を終了した。

第2次調査は9月3日より開始し、1次調査において設定した $3m \times 3m$ のグリッドの北側を発掘した。9月13日、1号竪穴住居址の北側に2戸の住居址を確認し、南側より2号竪穴、3号竪穴住居址とした。9月19日より各竪穴の実測および全体測量を行ない、9月21日に調査を終了した。

〈調査概要〉

B地区は南面したなだらかな斜面に位置し、その前面には、広戸川の流れにそって水田が続き、 $3.5km$ ほど西に竜が塚古墳がある。

1号遺構は、間口3間、奥行2間の掘立柱の建物跡と見られ、各柱間は8尺~9尺で一定していない。2号遺構は1号遺構の掘立柱に隣接しており、長径 $3.5m$ 、短径 $2.1m$ の楕円形の小竪穴である。1号竪穴住居址は、1辺が $3m$ の方形でカマドが北壁の東寄りにきずかれている。2号竪穴住居は、もっとも北側に位置し、南北に $4.6m$ 東西に $4.4m$ のほぼ方形のプランであ



第6図 古屋敷遺跡遺構配置図

る。カマドは白色粘土で作られ、竪穴の北側に1.2m、幅20cmの煙道を有している。3号竪穴住居址は、黒色土を掘り込んで構築しているため、全体のプランがつかみにくい住居址であった。カマド附近からは、厚さ20cmほどの間に、焼土・木炭が多量に出土していた。（発掘面積 580m²）

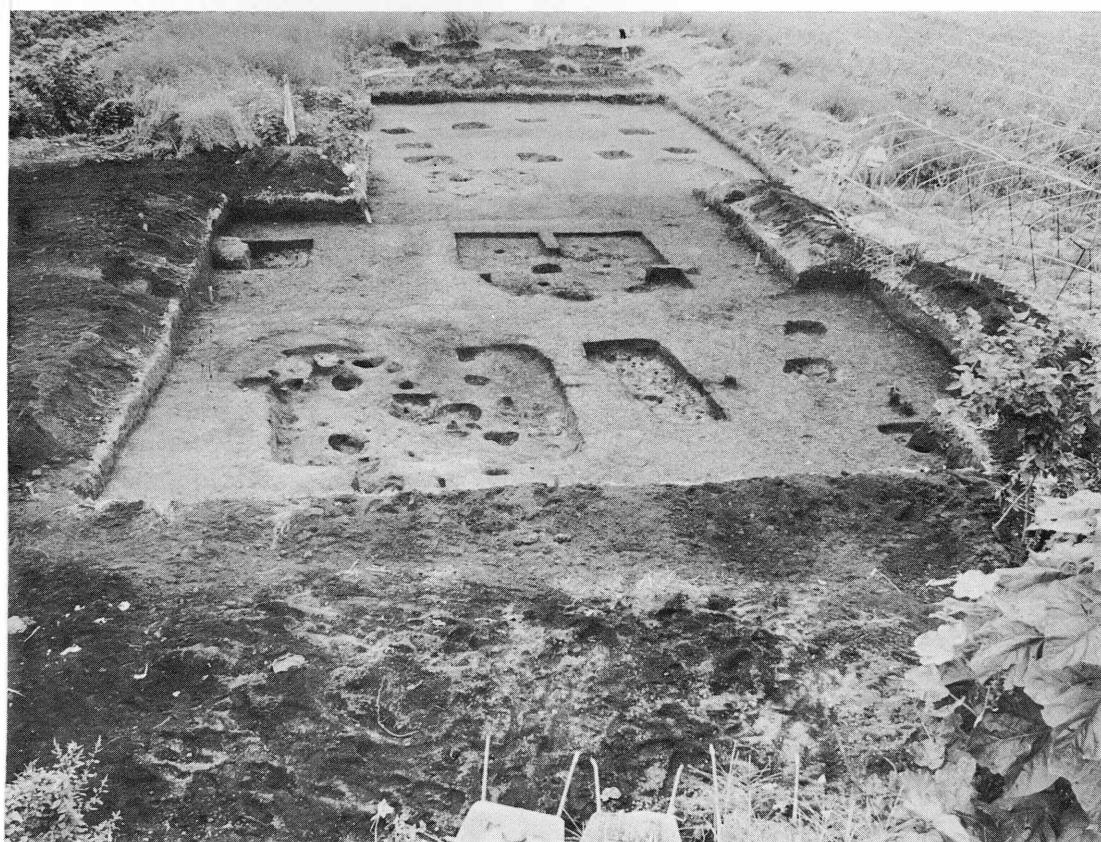
遺 物

1号遺構は、柱穴の内部よりロクロ痕のある小量の内黒杯片が出土しており、時期的には平安時代初期とみられる。2号遺構は楕円形の掘り込み内より、土師器・須恵器の破片が多量に出土しており、墨書銘のある土師器などから見て平安時代初期と思われる。2号住居址からは、完形で内黒土師器の杯が出土しており外側に段がありロクロを使用していない事などから、奈良時代後半と見られる。3号住居址からは、土師器の杯・甕の破片が多量に出土し、時期的には平安時代初期とみられる。

総 括

B地点は、奈良および平安初期の遺構・遺物が発見されたが、本調査では、1. 竪穴の小型化 2. 掘立柱跡をもつ高床式建造物の存在が注目される。

なお路線の東西側にも遺構が存在するものと推定され、遺構の規模がどのようなものであったか、また今回発掘された資料が集落の中でどのような位置と意義を有したものか関心がもたれる。



第7図 古屋敷遺跡全景(北東より望む)

6. 岩渕境遺跡（第1次）

〈調査日誌〉

11月14日現場着、10時より発掘区東側山林の草刈りと発堀区設定、11時半より表土剥ぎを開始する。夕刻ごろ土製錘車が出土。15日には掘立柱穴が検出されたため、全面発掘に移行した。21日までにはほぼ全面の発掘が終り、グリッド間の畦を実測後除去。22日熙寧元宝が出土。26日には清掃を行い、柱列と溝がほぼ全景をあらわした。27日に全体写真撮影後、精査にはいり、28日には1号ピット、2号かまどが、又発掘区東端より1号住居址が検出された。29日より柱穴の確認作業を行い、並行して1号ピット、2号かまどを発掘開始11月30日に遣り方を設定するとともに、12月3日より1号住居址も発掘を開始した。翌4日より実測開始、終了と共に掘立柱穴の断面、掘り上げを行ないつつ、5日までにはほぼ作業を終了した。なお、6日、7日の両日、図の補足と遣り方撤去を行ない、全作業を終了した。但し1号住居址の所在より、今回発掘区と路線幅の間の山林中に遺構が広がる可能性が生じ、第2次調査を行なう予定である。

〈調査概要〉

○遺跡：須賀川市古館付近で、阿武隈川に合流する釈迦堂川の支流江花川に臨む北側の山裾に位置する。遺跡の背後の丘陵には十三仏壇古墳群があり、西方約4kmには式内社鉢衡神社と亀居山祭祀遺跡があり、又、東北縦貫道関係では東約2kmに鏡石二タ通遺跡がある。

山裾の畠地約1,400m²に、1辺3mのグリッドを設定、山側から発掘を行なった。その結果、発掘区のはば中央に南西から北東にかけて掘立柱列が、発掘区東側やや北寄りに1号住居址が検出された。又、掘立柱列の一列をほぼ完全に覆って、より新しい焼土の入った溝が北東から東西に走り、その溝を切って発掘区東西すみに、2号カマド跡と、それにともなう1号ピット跡を検出した。

○掘立柱列：発掘区のはば中央より西方にかけて、ほぼ東西方向、長さ14.5m、幅7.5mの範囲に30箇所の掘立柱穴を検出した。各掘り方は、一辺80cm前後の方形又は隅丸方形で、深さ1.6m前後。柱は直径35cm内外の円柱で、柱穴下方には根巻きの痕跡がある。柱穴が腐蝕した痕に空洞が残ったものもある。これらの柱列は、発掘中には7間×4間で西と南に廊がつくように考えられたが、実際は柱の間尺が180cmから245cmまでバラバラで、対応するものもなく、建物痕とするには、実測図の整理が終るまで確証を保留せねばならない。又、柱穴に焼土の落ちこんだものがあり、南側母屋の柱列上に重って焼土入り溝がある。掘立柱列はこの溝より古く、さらにこの溝は2号かまどによって切られているから、2号カマドの年代より古いことが窺われる。なお西側は重複した柱穴があり、小規模な掘立柱群が以前にあったものと思われる。これも平面は未確認である。

○1号堅穴住居址：発掘区東端にあり、北側にカマドをもつ4.7m×4.7m、深さは東壁で60cmに及ぶ、割合保存のよい堅穴住居址である。カマドの東側に貯蔵穴、東北隅をのぞく四隅には柱穴が検出された。又、カマドは煙道をもっており、主体部は粘土によって構築したものである。貯蔵穴中、及び床面より浮いた埋土中に、丸底で内面黒色処理を施した土師器杯を含む、須恵器、土師器が検出された。

○2号カマド跡、1号ピット：発掘区北西すみにあり、非常に複雑な遺構で、中央に、東向きのカマドをもつ長方形の堅穴状の掘りこみがあり、その南北に直径3mほどで、堅穴状遺構より30cmほど深い不整円形のピットが付属している。そして、埋土の中層に焼土を含む面が見られる。カマドの周辺から土師器片、南側のピット(1号ピット)からは、鉄片、スラグ、ロクロ痕をもつ土師器片などが出土した。又、埋土の上から掘りこまれた柱穴があり、これは掘り方をともなっていない。

カマドは、幅約50cmの固く焼き締った天井部と、あまり焼けておらず、木炭、灰の堆積した床面が判別できるが、左右の壁は不明で、煙道も検出されず、一般の堅穴のカマドとは異っている。スラグの出土から製鉄と関係するのではないかと考えられるが、確証は得られていない。

○遺物：発掘によって出土した遺物はきわめて少なく、総数19点にすぎない。表土より土師質の紡錘車と、

「熙寧元宝」が出土した他、1号住居址より、内面黒色処理を施した丸底の土師器杯を含む須恵器甕、土師器杯、甕などの破片9点が出土した。丸底土師器杯は貯蔵穴に伴うものと考えられ、住居の年代を奈良時代前期に比定できる。又、2号カマド及び1号ピットよりは、内面黒色処理を施し、ロクロ痕を有する平底の土師器杯が出土している。杯の底面に手持ちヘラケズリの技法が見られ、1号住居址より新しい奈良時代末から平安時代初期の遺物であると考えられる。遺構の切り合いから、掘立柱列は2号カマドのロクロ杯より古いと判明しているが、柱列にともなう遺物は検出されなかった。



第8図 堀立柱列全景(西より)右後方に1号住居跡が見える

7. 治部池横穴群

〈調査日誌〉

第一次調査

○10月1日～10月5日 調査地区杭の確認と下刈り作業のあと、横穴の所在確認調査を行なう。その結果、二段に横穴列の存在が想定され、明確な位置確認のため下段部の粗掘りを行なう。7基の横穴を確認。これらを調査対象の横穴とし、東から順に1号～7号横穴と決定する。先ず、3号横穴と5号横穴の羨道部の調査に入る。早くも、3号横穴より長頸壺が、5号横穴より土師器杯、蓋、須恵器杯、甕の破片等出土する。

○10月8日～10月9日 2号横穴の羨道部堆積土の除去作業と並行して、3号横穴は、羨道前部上面堆積の凝灰礫の性格追求調査を行なう。また、玄室奥壁に人骨片（頭蓋骨・大腿骨）を検出する。4号横穴羨道より内黒土師器杯、短頸壺、鉄製品（鞘尻）出土する。堆積土のセクション図作成。5号横穴も同様、セクション図作成。後、遺物の平面実測図の作成。

○10月15日～10月19日 4号横穴玄室より直刀一振出土。3号・4号・5号横穴は図面を作成し調査を終える。新たに1号・6号・7号横穴の調査を開始する。1号横穴より土師器杯、甕の破片、6号横穴より土師器杯、長頸壺、鉄製品出土。セクション図、遺物平面図を作成する。2号横穴袖玄室内に「山千」の線刻文字を発見。

○10月22日～10月24日 1号横穴羨道壁の小穴を調査する。1号・2号・6号は、図面を作成し調査を終了する。7号横穴は、玄門部の閉塞が完全のため、平面図、断面図を作成し、玄室内の調査は次期の調査にまわす。最終日は、図面の補正、写真撮影、また、2号横穴と7号横穴の埋めもどしを行い、一次調査を終る。

第二次調査

○12月6日～12月7日 第一次調査で発掘した横穴の清掃後、横穴確認調査を行なう。位置確認済みの上段横穴三基の調査（9号・10号・11号）。羨道部の堆積上の除去作業。発掘区西端より、横穴一基を発見する。

(12号)

12月10日～12月14日、9号、10号、11号横穴それぞれのセクション図を作成し、排土作業を行なう。平行して、11号横穴と12号横穴間の横穴確認作業を進める。しかし、この地区の横穴は同レベル上に存在せず、第一次調査で確認されている7号横穴の西隣りに位置する8号横穴より、12号横穴の方向に斜行状に五基の横穴を確認（13号・14号・15号・16号）する。7号横穴閉塞石の取りはずしを行ない、玄室を調査する。

○12月17日～12月21日 7号・9号・10号・11号・13号・16号横穴は、高さ3m以上もあるセクション図の作成を行ない、羨道、玄室の排土作業に入る。14号・15号も8号と同様である。

○12月24日～12月26日 14号・15号横穴は、実測図面作成して調査を終了する。24日の2時より、発掘現場にて現地説明会を行なう。高木豊文化課長、須賀川市教育委員会の相良氏来跡。8号横穴羨道部より須恵器大甕、長頸壺、土師器甕、鉄製品等出土する。図面作成し終える。平板測量を行ない、図面の補正、写真撮影して本遺跡の調査を完了する。

〈調査概要〉

本遺跡は、須賀川市街地より北方に約3km、国道4号線の東方300mの東西に延びる丘陵の南斜面に位置する。南前方は、幅50mほどの湿地谷を経て、緩やかに南傾する台地が視界を妨げ、さらに南方の水田地帯を東流する滑川が、遺跡の東方約1kmを北流する阿武隈川に合流して、当地方の肥沃な土地を潤している。

この地域には、比較的多くの遺跡の存在が知られており、滑川字関ノ上、坂上、四十壇西谷地などには、古墳時代の遺跡が残っている。

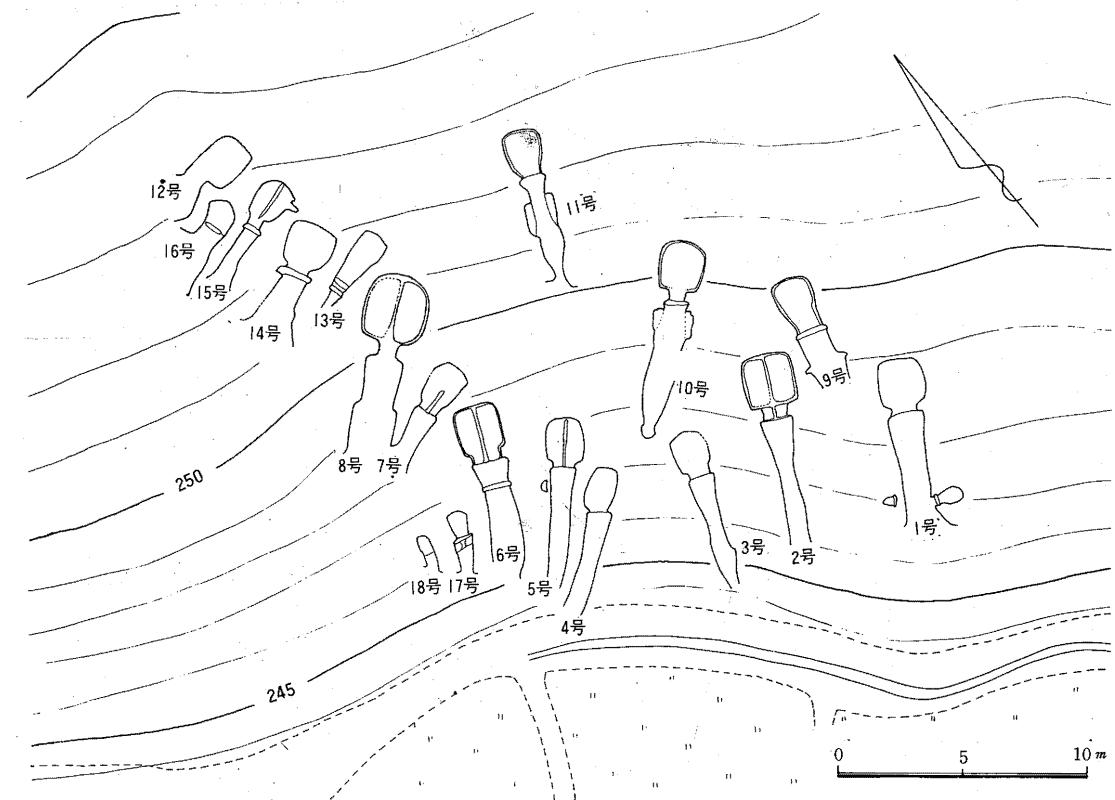
今回調査の対象となった横穴は、新幹線路線内に存するもの18基であるが、本横穴群は、路線外にもその数を増すことが、地形、ボーリング調査等で容易に想像できる。横穴の数は、百基を越すものと思われる。

本遺跡の調査方法として、各横穴の堆積土層のセクション図を作成することにより、遺物の出土層位の把

握、遺物・横穴間の新旧関係の追求等は主眼を置いた。しかし、紙面の関係上、遺物や各横穴についての説明は、後日刊行される本報告書に譲ることにする。

横穴の構造等に関する点での、本横穴群の特徴を簡単に述べておく。

1. 羨道・玄門・玄室の各部より構成され、玄室平面形は、正方形・長方形・橢円形、また、玄室・玄門の区別不明瞭なもの等、種々の形態を有する。
2. 2号横穴玄室内に「山子」の線刻文字を発見。
3. 2号・8号横穴の玄室天井は、四隅から対角線上に幅5cmの切り込み線があり、その交点を円形に切り込む家形を呈する。
4. 羨道部両側壁に切り込みがみられ、石積みされているものがある。
5. 1号・5号・15号横穴の様な、小形の横穴が存在する。



第9図 治部池横穴配置図

8. 德定遺跡

〈調査日誌〉

10月30日(月)～11月4日(土)：担当者より調査員紹介、発掘の意義、諸注意等の話がある。発掘点の3地区を国鉄の名称に従い、東京側より3P・4P・2Aの各地区に分ける。各地区における調査員の分担は、2A地区は、渡辺、4P地区は長尾、3P地区は相馬が主に受け持ち、他の調査員は、隨時各地区的調査に当ることにした。2A地区はグリッド設定。3P・4P地区は桑の抜根作業の後、グリッド設定する。発掘開始後まもなく、各地区から、遺物の出土相づぐ。4P地区より弥生時代の遺物を検出。各地区より、土師器を伴う住居跡プラン確認。土師器類多数出土。一部実測開始。

11月6日(月)～11月11日(土)：2A地区は、1m以上の深い層から遺物、遺構が確認される。砂質土の為、調査難行する。3P地区の傾斜面に一定間隔で小穴があるが、性格は不明である。4P地区東南端グリッドで約4mの深い土層から、縄文時代中期・後期の遺物少量検出。2A地区出土の土師器は、完形品が多く、セットで出土している所もある。住居跡プランの確認は、砂質土のため困難を極める。カマドと、床面の炭をたよりにプランを検出。

11月13日(月)～11月18日(土)：4P地区の測量。2A地区の精査。3P地区住居址内より、人骨片出土。4P地区から、弥生時代の管玉出土。2A地区の一部埋めもどし開始。各地区実測に入る。

11月20日(月)～11月25日(土)：各地区とも、遺構、遺物の出土相づぐ。4P地区から紡錘車検出。2A地区から底部穿孔の土師器を検出し、付近に骨認む。各地区、遺構の精査、実測、写真撮影に全力を尽す。

11月27日(月)～12月2日(土) 11月28日、現地説明会を行なう。参会者約百名を越す盛況。各地区の実測、埋めもどし作業をする。

〈調査概要〉

遺跡は、阿武隈川が安積永盛付近で大きく腕曲する地点に近く、川岸より約100m以内の微高地に位置する。遺跡の総面積は、約5万m²に及ぶ。調査対象面積は、2A地区—2,106m²、4P地区—1,444m²、3P地区—1,444m²であり、その約8割を調査した。遺跡は、ほとんど砂層上に立地し、土師器は1m以上も深い地層から検出される地点などがあり、縄文式土器にいたっては、1.3mから4mを越す深さより出土するなど、調査は困難を極めた。住居跡プランの確認も、カマドの検出は容易であったが、砂質土の為、壁がわかりにくかった。3地区ともカマドの検出が多く、計約40戸の堅穴住居址を推定したが、プラン検出不可能なもののが多かった。カマドは、煙道の長さが一定ではなく、いくつかの形態に分類できそうである。各住居址は、レベルがかなり違っているものもあり、幾つかの時期に区分できるものと思われる。3P地区からは、性格不明の東西に走る溝状遺構の検出や、古銭(開元通宝、元祐通宝等)の出土があり、土師器を伴う住居跡以外の遺構の時代は明らかでない。総じて、古墳時代から、平安時代にかけての集落跡であり、数百年にわたるものが多いため、住居址が、切り合っていて、プランがわかりにくい。円面鏡破片の検出等もあり、文字を書ける人がいたと推定される。なお、4P地区の5号火災住居址から採集の炭による14C測定によると、《B.P 1320年 ± 85年・1290年±80年》という結果が出ている。



第10図 2 A 地区 1 号住居址



第11図 2 A 地区住居址・土師器セットの一例

9. 皆屋敷遺跡（第一次）

〈調査日誌〉

昭和45年度の表面調査において遺物の発見がなされなかつたが、地元の古宮正英氏が本遺跡の遺物を所有していたことから、昭和48年10月4日の試掘となつた。その時、土師器を伴う小堅穴の検出があり、11月19日より、本調査を行うことになった。11月19日、全調査区（99m×15.5m）に3m×3mのグリッドを設定、順次北側から粗掘りにとりかかつた。調査発掘面積は約1500m²である。11月22日までに第I区及び第I・区拡張区の粗掘りを完了、引き続き11月26日以降、柱穴・不整形堅穴・溝の精査を行い、並行して第二区の粗掘り及び精査を行つた。12月4日より第III区の粗掘り、及び精査を行い、主要遺構が路線外にのびていること、用地未買収で桑園の一部が発掘困難であったことなどから再調査を機し、第I区・第II区・第III区の写真撮影・実測を行い、終了した。

〈調査概要〉

遺跡 郡山市の北東9kmの位置にあり、阿武隈川が南北に蛇行する回折されたところにある。北方には、高山廢寺が遠望され、古代社会において安積・田村の接点にあり重要な位置をしめていたと思われる。

本遺跡全調査区域内に3m×3mのグリッドを設定し千鳥式に掘り始めた。層位は、第1層（耕作土層）第2層（褐色土層）は、以前に土地利用変更の際、攪乱されており遺構は第3層（地山）を掘り込んで構築されている。

遺構 本遺跡で検出した遺構は掘立柱建物跡遺構2棟、溝状遺構9例、円形大型堅穴遺構3例、不整形小堅穴遺構多数、完形土師器を多く含む円形小堅穴2例、と多くの遺構が検出された。

1. 溝状遺構

本遺跡において9例が検出された。溝を分類すると、Ⓐ巾が1m前後で深い溝、Ⓑ巾が1m前後で浅い溝、Ⓒ巾が1m前後で溝中にピットを穿っている溝に分類できる。いずれも東西にのびる溝である。

2. 小堅穴遺構

小堅穴遺構を分類すると、Ⓐ掘立柱跡と思われる径20cmの掘り方をもつもの、Ⓑ土師器を多く伴う円形ピット、Ⓒ堅穴住居跡の柱穴と思われるピット（多くの土師器を含む円形ピットが隣接している）Ⓓ土器を含まない不整形ピットになる。

3. 円形大型堅穴遺構

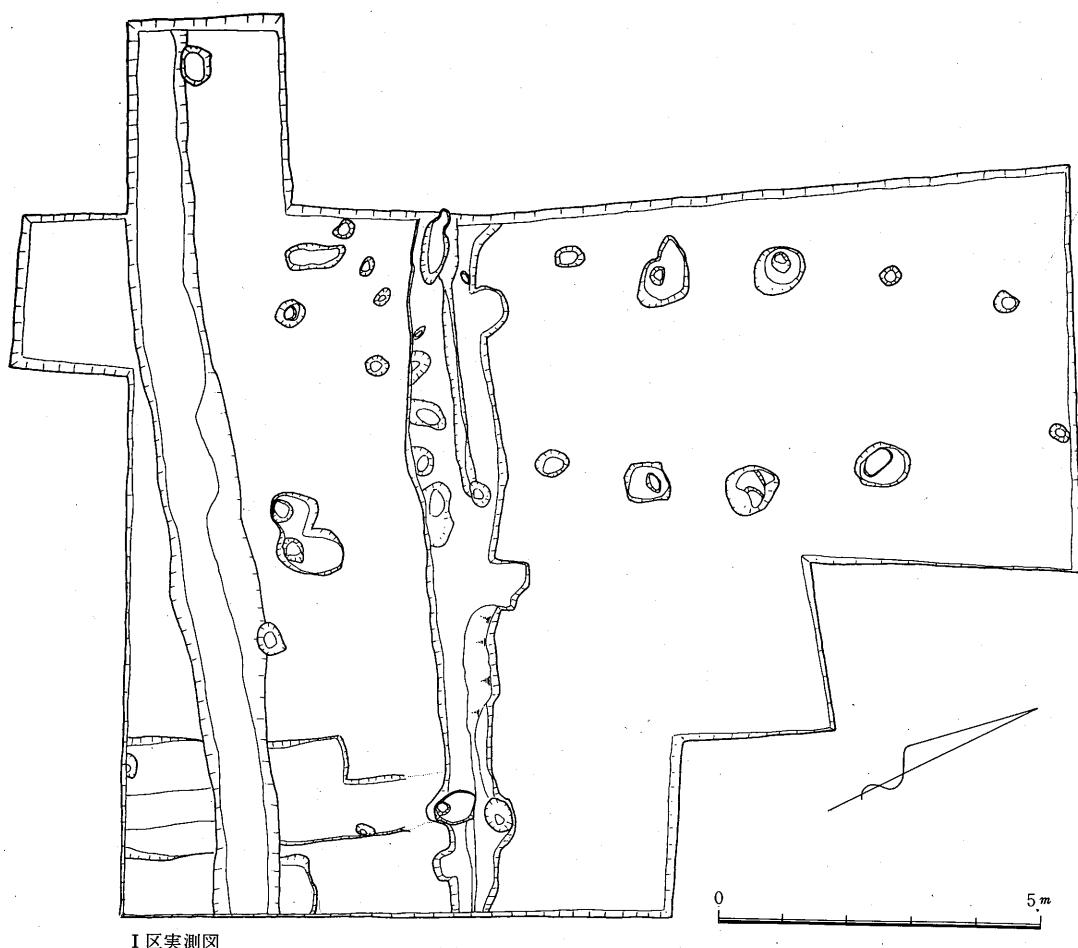
II区より径3mの円形堅穴が3基検出された。この堅穴内上層面より土師器・鉄滓・木炭が検出された。

4. 掘立柱建物跡遺構

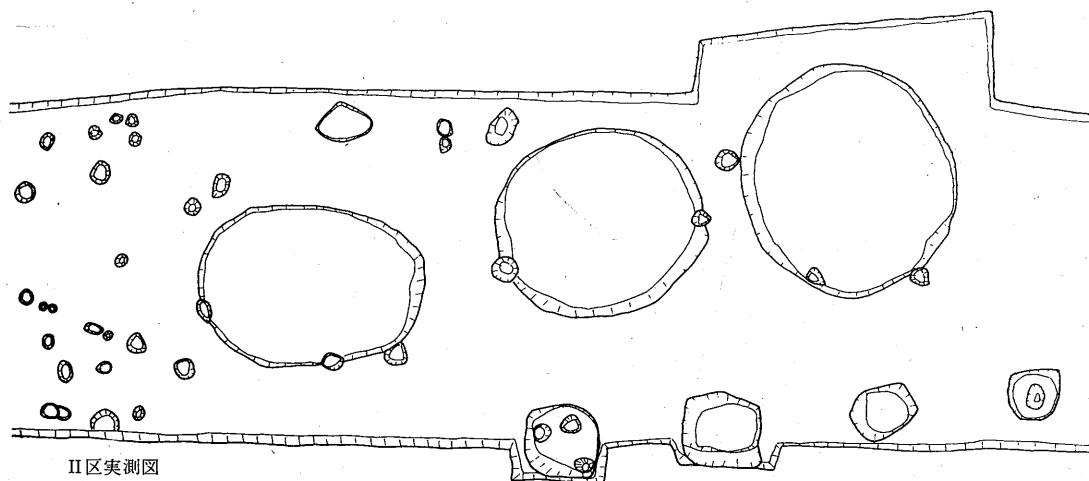
2棟検出された。I区では間口3間、奥行1間の掘立柱の建物跡が見られ、II区では柱間8尺と推定される掘方が4個ほぼ南北に並んで発見された。間口3間、奥行3間程度の掘立柱建物跡となると思われるが、大部分が路線外にのびており、本調査では全様を明らかにできなかつた。

遺物 遺物はダンボール箱5箱で意外に少ない。これは土地利用変更のため包含層を削平されているためと推定される。しかし土師器完形品30点以上が円形小堅穴内より出土している。その他、溝中及び小堅穴内において遺物の出土が認められた。本遺跡の土師器の相対年代は東北土師器型式における第7型式と推定され9世紀初頭からを10世紀後半に位置付けることが妥当であろう。その他の遺物として五輪塔の宝珠の破片、鉄滓が伴出し遺跡としての特色を示している。

まとめ 本遺跡において堅穴住居跡は検出されず、掘立柱建物跡2棟、それに付随する多くの溝が検出されていることから公的な遺構とも考えられる。本遺跡の性格について今後、II区の掘立柱建物跡の概要の把握と、溝との関連の調査により明らかにされるであろう。



I区実測図



II区実測図

第12図 皆屋敷遺跡・I・II区実測図

10. 御 前 古 墳

〈調査日誌〉

8月1日、10時作業開始。草刈りと並行して全体地形を測量、午後より墳丘を十字形に横断する巾 1.5m のトレンチを設定、表土剥ぎ。雷雨のため一時中断するも、墳丘裾より須恵器、石器片など出土。2日よりトレンチの掘り下げに並行して墳丘の表土剥ぎにかかる。3日にかけ、墳丘中、及び十字トレンチ内より、白色粘土の散布、土師器小片の散布がみられたが、中心が予備調査時のトレンチに攪乱されているためもあって精査に手間どる。4日から地形測量を補正し、5日に墳丘断面図を作成、遺物を収納して調査を終了した。

〈調査概要〉

遺跡：県道本宮岩代線が安達郡白沢村の中心部へ入る 1 km ほど手前に、道路南側に山裾が盛り上ったような小墳丘がみられる。現場は礼堂の地名が残り、遺跡背後に「御前墓」と称する方 1.5m 程の礫積みの壇があるなど、古寺院の存在が予想され、遺構については、古墳のほか火葬墓、経塚の可能性も考慮して調査を実施した。墳丘は北向斜面にあり、直径 7 m、高さ 1 m の円墳状を呈し、南側には周濠状の凹地が見られた。又東側は、開墾によって墳丘直前まで削土されている。墳丘の中心を通る幅 1.5m のトレンチを入れ、内部主体の検出を試みた。トレンチの長さは、東西 13 m、南北 11.5 m で、周濠状の凹地の検出も同時に行つた。又墳丘は、トレンチより 30 cm 幅の畦を残して全面の表土剥離を行い、墳丘の原形確認を試みた。

その結果、この墳丘は基部の直径東西 7.7 m、南北 8.5 m、高さ 80 cm のほぼ円形の小規模な盛土であると判明した。墳丘断面を見ると、地山上に旧地表を示す褐色土があり、その上に黒色土の間層をはさむ明褐色土を盛り上げ、中心付近では白色土を用いて墳丘を作っている。しかしながら、ほぼ全面を発掘したにもかかわらず、中央の白色土面と、その直下より出土した土師器碎片のほかはなんら遺構は検出されなかつた。

はじめ周濠と考えられた凹地は、南側にあっては幅 1 m ほどの黒色土の落ち込みとして検出されたが、全面発掘によれば、完全に墳丘を囲む溝とはならず、南西の墳丘裾のをめぐって出現し、南東ではきわめて浅い。このため墳丘の南東は地山がそのまま高まりを残し、あたかも南東に通路があるかの如き形状となる。東側は前述のごとく畑地にするため削土され、溝は全く不明、北側も県道によって削られ、不明である。この溝状遺構中、墳丘の南側から須恵器甕、南西から内面黒色処理の土師器片が出土している。いずれも埋土の黒色土中から出土した。

遺物：須恵器、土師器及び石器があり、すべて小片である。須恵器は墳丘の南側溝より、出土したもので、内外面に叩き目痕を有する甕の破片で、平底である。

土師器の内、墳丘南西部の溝から出土した内面黒色処理のもの、墳丘中心部の白色土直下から出土した器形不明の小片がある。前者は杯の破片であるが、共に年代不明である。



石器は、墳丘内や表土から採集されたもので、剝片である。上方の平坦地から流れてきたものかも知れない。表土からは、他に礫数点が出土しているが、墳丘との関係は不明であった。

第13図 御前古墳全景(南側より見る)

III 調査遺跡

調査主体者 福島県教育委員会・日本国有鉄道

協力機関 関係市町村教育委員会

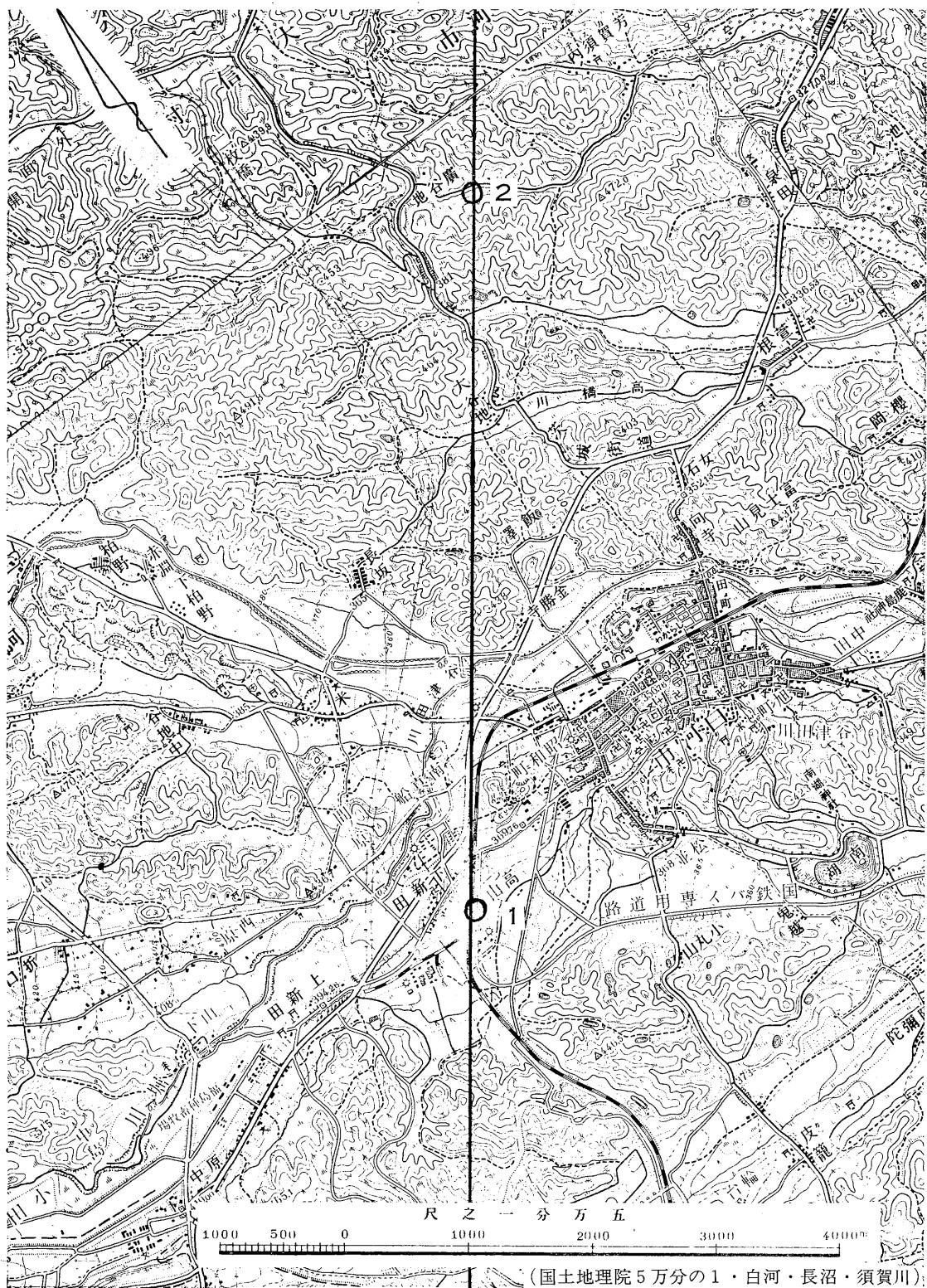
遺跡名	所 在 地	調査期日(調査日数)	外部調査員および協力者	遺跡番号
道 南	西郷村小田倉字道南	昭和48年7月3日 ～8月8日(10日)	古川利意・日下部善己 吉田幸一・渡辺幸子・渡辺 功	1
泉 川	白河市小田川字広谷地	昭和48年10月8日 ～11月15日(24日)	原川雄二・小林義典	2
赤坂裏	大信村中新城字赤坂裏	昭和48年6月4日 ～7月6日、9月3日 ～9月7日(30日)		3
芹 沢	天栄村大字小川字芹沢	昭和48年3月5日 ～3月17日(12日)	大木吉夫・斎藤 隆	4
古屋敷	天栄村大字飯豊字三郷池	昭和48年5月28日 ～6月5日、9月3日 ～9月21日(21日)	大木吉夫	5
岩渕境	須賀川市大字岩渕境	昭和48年11月14日 ～12月5日 昭和49年1月28日 ～2月8日(10日)		6
治部池	須賀川市大字滑川字十貫地	昭和48年10月1日 ～10月24日、12月6日 ～12月26日(30日)		7
徳 定	郡山市田村町徳定・御代田	昭和47年10月30日 ～12月4日(30日)	田中正能・鈴木安信・金崎佳生 原川雄二・横山英介(旧職員) 菅野佐市・坪池忠夫・菅原文也 斎藤 隆・永山倉造・渡辺 功 佐久間豊・小野美代子	8
皆屋敷	郡山市西田町鬼生田字皆屋敷	昭和48年11月19日 ～12月12日(17日)	金崎佳生	9
御 前	白沢村大字糠沢字礼堂	昭和48年8月1日 ～8月5日(5日)	西 徹雄(担当者)・山田 広	10

文化課文化財保護係

課長	高木 豊	嘱託	長尾 修
課長補佐	菅野 學	"	佐藤 満夫
係長	今野 栄八	"	赤井畠 まき子
文化財主査	渡辺 一雄 (3.4.7.8.担当者)	"	大越 忠士
"	鈴木 啓 (1.担当者)	"	寺島 文隆
"	目黒 吉明 (2.5.9.担当者)	"	八巻 一夫
文化財主事	木本 元治 (6.担当者)	"	高倉 敏明
嘱託	野崎 準 (6.担当者)		

IV 遺跡所在地図

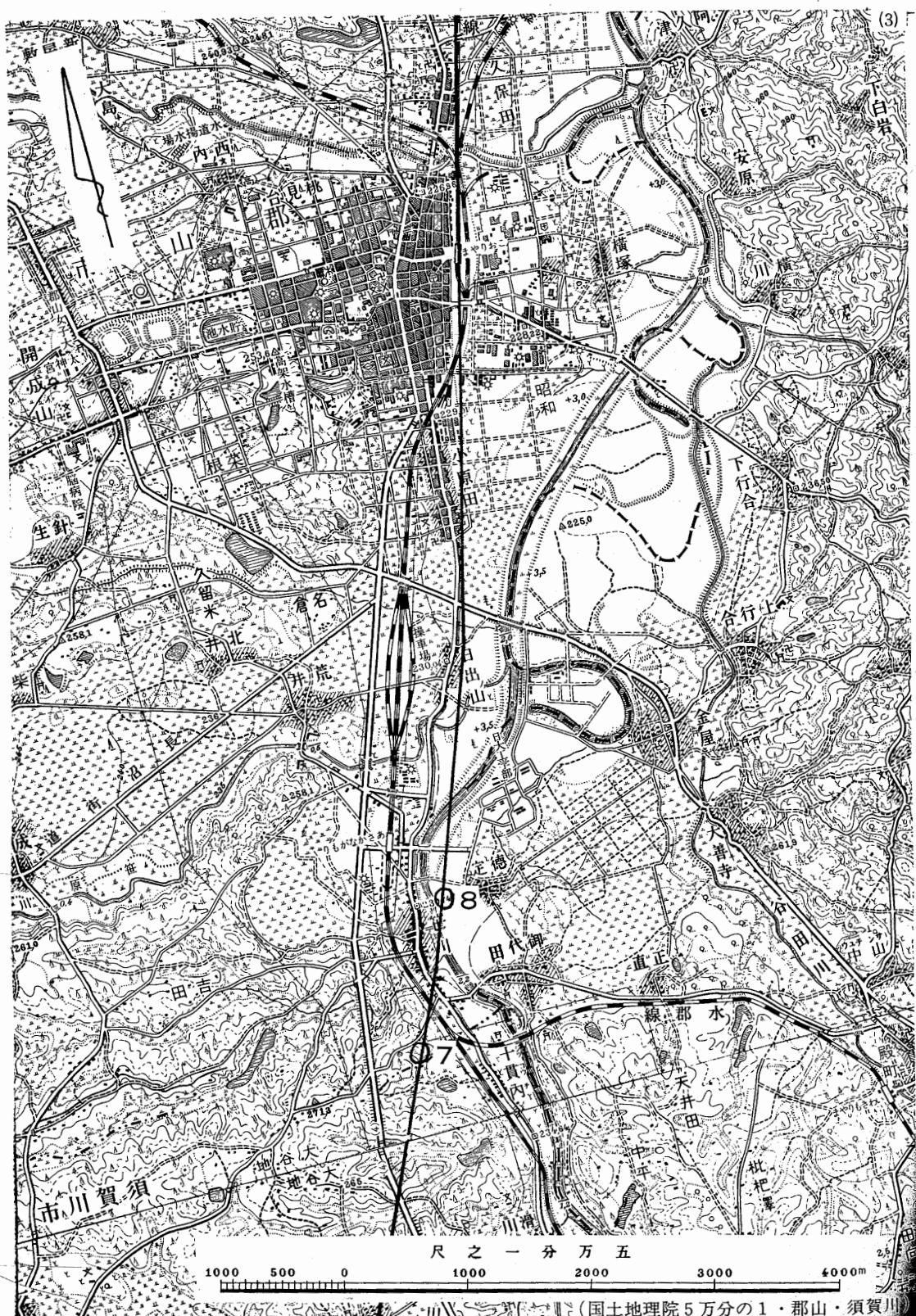
(1)

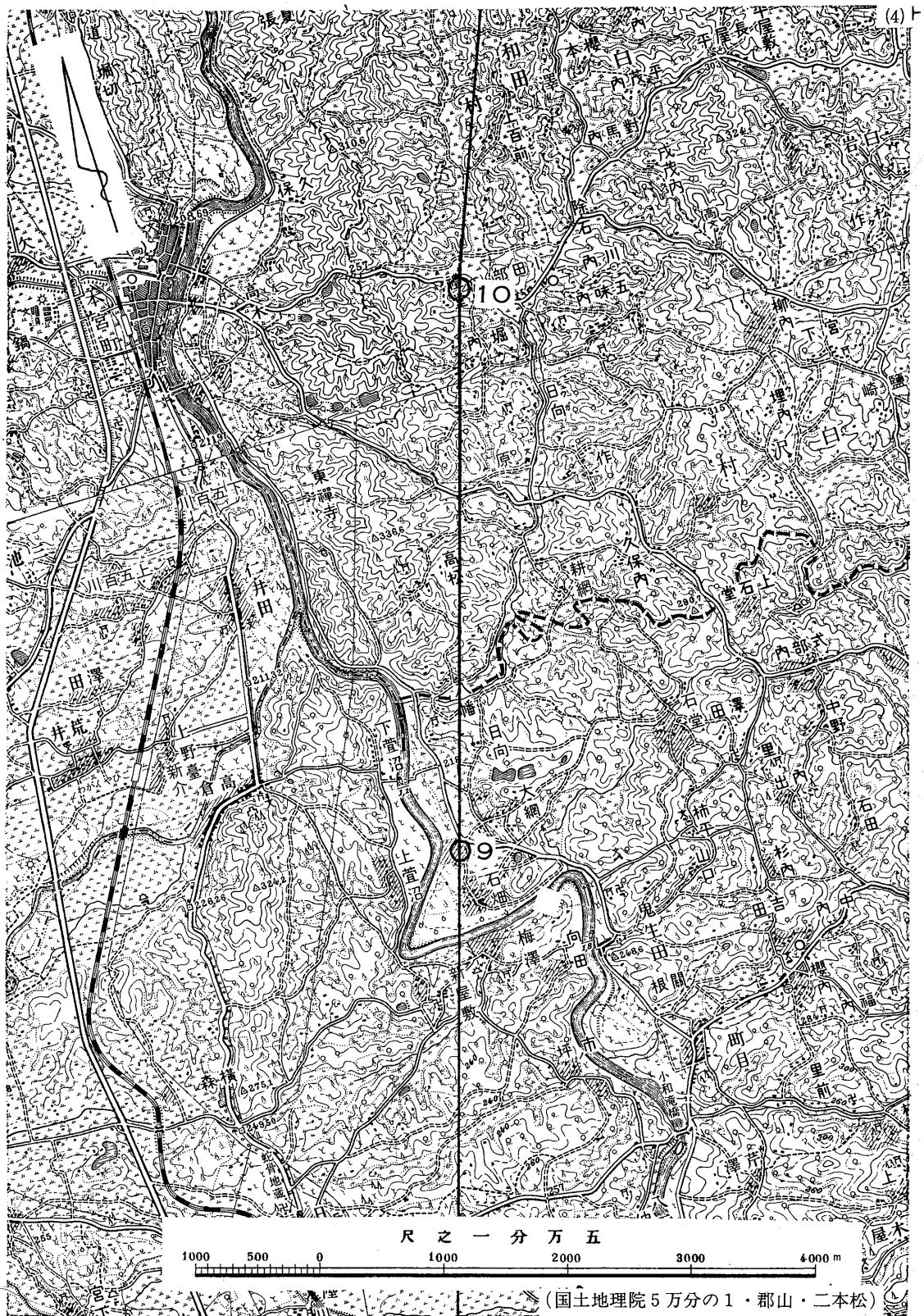


(国土地理院 5万分の1・白河・長沼・須賀川)



(国土地理院5万分の1・須賀川)





V 調査遺跡略年表

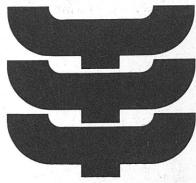
実年代	時代	区分	当時のようす	新幹線 遺跡名	遺跡のようす	
B.C 10,000	旧石器	前期	打製の石器を用い、狩猟や自生植物の採集をして生活していた。	泉川遺跡	約7,000年前の遺跡で、土器や石のやじりのほかに、径1mほどの墓穴と思われる穴が20数個所発見されている。	
		後期				
B.C 300	繩文時代	早期	土器をつくるようになり、打製・磨製の石器を用い、狩猟漁撈と自生植物の採集を生業としていた。	道南遺跡	この三遺跡はいずれも住居址で、カマドや柱穴などがわかり、家の中でつかわれていた土師器や須恵器をはじめ、糸をつむぐ紡錘車などの生活用具が発見されている。	
		前期				
A.D 300	弥生時代	中期	稻作が開始され、金属器も大陸から伝わってきた。	徳定遺跡		
		後期				
A.D 593	古墳時代	前期	稻作技術の向上とともに各地に豪族が誕生し、高塚式の大きな墳墓を築いた。	芹沢遺跡		
		中期				
A.D 645	飛鳥時代		・聖德太子摂政となる。 ・法隆寺の建立	治部池横穴古屋敷遺跡	東北地方では、この時代になつても、豪族は古墳をつくっていた。横穴は、群集してつくられるのが特長で、穴居の跡ではなく、お墓である。	
A.D 794	奈良時代		・大和朝廷が東北地方に勢力をのばす。 ・東北地方にも仏教が伝わる。	赤坂裏遺跡 皆屋敷遺跡 岩渕境遺跡	この時代になつても、一般の人々は竪穴を掘って、土を床とした家に住んでいた。 しかし、皆屋敷や岩渕境遺跡では、このほかに掘立柱をたてた建物の跡も発見されている。	
A.D 794	平安時代		・坂上田村麿呂、蝦夷地經營にあたる。 ・平泉文化の盛行			

数時代にまたがるもののは、中心の時期をとつてある。

VI 用語解説

- グリッド(Grid) 発掘の際、調査区に正方形の枠目を張りめぐらし、市松型に掘って遺構をさがすが、この枠目をグリッドという。
- トレンチ(trench) 発掘の際、調査区に長方形の溝を幾本も掘って遺構をさがすが、この長方形の溝をトレンチという。
- 遺物、遺構 出土した昔の土器などの「物」を遺物といい、住居跡などの建物あるいは溝、穴などを遺構といいう。
- ピット(pit) 穴をピットという。
- 層位 土の堆積状況を層位といい、土器の年代決定の決め手となる。
- ローム(Rome) 火山性土壤をロームといい、洪積世(1万年以前)までに堆積し、旧石器文化以外の遺跡を発掘する場合は、ローム層上面で遺構の確認することが多い。
- 円面硯 円形のすずりで須恵質のものが多い。
- 鉄滓 タタラ製鉄の際にできる鉄かすのかたまり
- 貼床 斜面上に住居址を建てる場合、床を平らにするため、土を盛って整地するが、その床を貼床といいう。
- 土師器、須恵器 古墳時代から奈良、平安時代まで続いて、ながらく製作された赤色の素焼土器の総称を土師器といいう。また古墳時代後半期以後日本で製作された陶質土器を須恵器といいう。
- 墨書銘、線刻銘 墨で文字が書いてあるものを墨書銘土器といい、金属性のもので刻みを入れて文字を書いているものを線刻銘土器といいう。
- 内面黒色処理 土師器の中には内面が黒色を呈し、磨かれているものがあるが、それを内面黒色処理が施された土師器といいう。
- 羨道部 横穴式石室や横穴の前半部を構成する通廊的部分を羨道といいうが、これにはほとんど石の天井がある。この通廊の入口を羨門といいう。
- 玄室 横穴式石室内の遺骸を安置する主室をいう。
- 尻鞞 大刀や剣の鞞の末端についている金具を指す。
- 玄門 横穴式石室や横穴の玄室と羨道を区分する所で、やや壁がせばまっており、溝が掘られていたり、段がついていたりする。

福島県文化財調査報告第46集
東北新幹線埋蔵文化財発掘調査略報 I
昭和49年3月31日発行
編集 福島県教育庁文化課
発行 福島県教育委員会



文化財愛護シンボルマーク